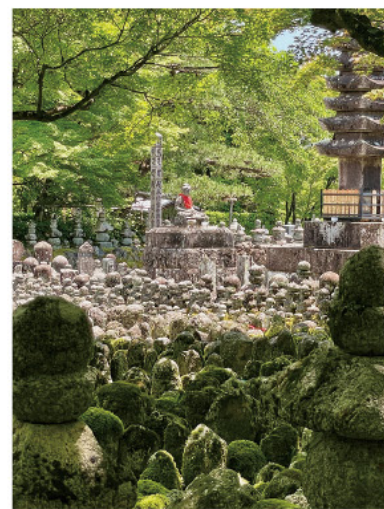




今宮神社の夏越の祓神事に遭遇。茅の輪くぐりで半年を感謝し後半の吉を願う。



ロビー全体を「百代(はくたい)」というギャラリーにした柳幸典。現代作家の企画展も楽しめる。



あだし野念仏寺の冷気でひんやり。嵯峨野奥の海外客の多さに驚いた。



大釜で炊き上げる美味しいご飯とこだわりの器遣いも楽しめる本格和食。



暮らす旅 京都 京の奥座敷、

湯の花温泉

文・写真／松岡伸吾(暮らす旅舎)

暮らす旅舎の京都本を取材するときは、数週間から月単位でアパートを借りる。まさに暮らす旅の原点だが、短期ならホテルにする。立地と価格が選択基準だが、最近は朝食と広さが加わった。実は病気をして酒をやめたのが原因だ。飲み歩いてホテルに戻り寝るだけだったのが、ノンアルで過ごせる行きつけのバーに顔を出し、早めに宿に帰るようになると、滞在の質が重要と感じた。朝食の美味しさはもちろんだが、スマートテレビがあればスマホと連携して好きなプログラムが楽しめるので重宝している。

今回は2泊のうち1泊は温泉にしようと思いついた。調べると北に行けば丹後や宮津にあるが、市内に近いとなると、地下水を沸かした温泉(?)を別にする、数は多くない。今回は、以前に紹介した保津川下りの出発地、亀岡市の湯の花温泉に決めた。

京都駅から快速で20分の亀岡は、子育てのしやすい「とかいなか」だとか。湯の花温泉は駅から西へ7キロの山あいであり、5軒ほどの温泉旅館がある。明智光秀の亀山城址が残る土地柄から、キャッチフレーズは「戦国武将が刀傷を癒した温泉郷」。

鄙びた温泉宿を想像していたが、送迎バスで到着したすみや亀峰菴は、3年前に現代作家柳幸典によりリノベーションされアート感覚にあふれた空間だった。玄関では柳の作品「神奈川沖浪裏」が出迎え、利休の待庵の土壁を再現したコーナーにはウォールホルの「花」を下敷きにした作品が掛かる。スタッフに促されて、柳の戦艦長門をモチーフにした鉄の立体作品があるロビーを通り抜けると、暖炉のある図書室でチェックイン。

マッサージチェアのある部屋には掛け流しの温泉風呂も付く。緑の中の露天風呂の後は、おくどさんのある食事室で鯉の洗いや猪肉のすき焼きなど和風フルコースをいただいた。2年前に柳さんが手がけた特別室もあるようだが、京の奥座敷で過ごす時間はスタンダードでも十分満足。翌日は嵯峨野を巡ったが、次回は貴船か鞍馬か大原か！